Hondaの交通安全情報紙
The Safety Japan
Since 1971
4・5
2010
APRIL・MAY
●編集室：本田技研工業株式会社 安全運転普及本部内
〒107-8556 東京都港区南青山2−1−1
TEL 03(5412)1736
http://www.honda.co.jp/safetyinfo/
●編集人：千葉英雄
※年間購読をご希望の方は、下記までお問合わせください。
㈱アストクリエイティブ　安全運転普及本部係
TEL 03（5439）1191　E-mail:sj-mail@spirit.honda.co.jp
SJ-Netは ホンダ　SJ 検索

CONTENTS

特集：子どもへの交通安全教育
子どもの特性を踏まえた教育の重要性……❶
危険予測トレーニング（KYT）／駐車車両の前を横断する（子ども編）……❹
交通安全指導「知っ得」情報／交通安全指導における効果的な話し方…❹
SJクイズ……❹
DOCUMENT EYE ㉓⑥
高速道路のサービスエリアで親子の行動を観察する……❺
地域のチカラ／鹿児島県の交通安全活動……❻
現場訪問／郵便事業（株）……❼
TOPICS①／Honda Cars東京中央野沢店「安全運転講習会」……❼
TOPICS②／鈴鹿サーキット「モートピア」NEWプッチタウン・オープン
TOPICS③／Hondaドライビングシミュレーター・フルモデルチェンジ
教育最前線／熊本県交通安全講習員・電動車いす研修……❽
読者の声……❽

特集：子どもへの交通安全教育

子どもの特性を踏まえた教育の重要性

子どもへの交通安全教育においては、それぞれの年代の特性を踏まえたアプローチが必要となる。今号では、そうした観点からHondaが開発した交通安全教育プログラムや教材を活用し、地域で展開されている子ども向けの教育の現場を紹介。各年代の指導に求められる教育的視点や効果的な指導について探る。

鈴鹿市立国府幼稚園で「Honda交通安全かるた」を活用して行われた交通安全教室

本田技研工業（株）熊本製作所での「大津地区親子交通安全教室」

アクティブセーフティトレーニングパークもてぎでの「親子でバイクを楽しむ会」

磐田市立豊浜小学校で「Honda自転車シミュレーター」を活用した交通安全指導

子どもの交通安全教育に求められる遊び心

鈴鹿市交通教育指導員の近藤麻里さんが最初に取り出したのは、かるたの「み」の絵札（左記参照）。じっくり絵札を子どもたちに見せながら、「道路を渡る前にやらなければいけないことがあったね」と問いかける。子どもたちはいっせいに「右！左！右！」と声をあげる。すかさず近藤さんは、「そうだったね。一旦止まって、右、左、右を見て、クルマが来ていないことを確かめてから、道路を渡りましょう」と指導する。

これは、2月24日に三重県鈴鹿市立国府幼稚園で行われた、園児向けの交通安全教室の1コマだ。このかるたは、ホンダが昨年8月に制作した子ども向けの交通安全教材「ホンダ交通安全かるた」（左記コラム参照）をもとに、集合教育用に大判として作成し、今年4月から販売したもの。今回はその販売に先駆け、国府幼稚園で大判かるたを使った交通安全指導の試行が行われた。

かるたの絵札を使った基本的な交通安全指導が終わると、後半はいよいよかるた取り。23人の子どもたちは4チームに分かれ、各チームから1人ずつ代表が出て、教室の中央に並べられた絵札のまわりに座り、かるた取りに挑む。

今度は指導員の浅野尚子さんが読み札を読み上げ、札をとった園児は前に出て、取った絵札を掲げる。その絵札を浅野さんが指しながら交通安全のポイントを指導。例えば、「チカチカしている信号は、クルマ用の信号の赤・青・黄色の何色と同じ意味かな？」と尋ねると、園児からは、「赤」「青」「黄」とさまざまな意見が出てくる。そこで浅野さんは、「チカチカの信号は、黄色の信号と同じで、『先へ進んではいけない』という意味です。だから、渡る前からチカチカしていたら、渡らないで待ちましょう」と、絵札に合わせた注意点を伝えていく。

この年代の子どもたちには、「止まる」「見る」ことを身につけてもらうことが重要である。動きながら見るよりも、止まって見るほうが、落ち着いて周囲の状況を確認できるからだ。こうしてかるた取りを楽しみながら、「止まる」「見る」といった交通安全の基本を指導する方法は、こうした幼児期の子どもに有効だといえる。国府幼稚園の園児たちはこの日、思いおもいに声をあげながら、身近な交通安全のポイントを学んだ。同園の石田典子園長は、「読み

指導員が絵札を見せて、子どもたちに問いかける

かるた取りで子どもが取った絵札について、指導員が説明

かるたで覚えよう！交通ルール

「Honda交通安全かるた」大判セットを販売！！

「Honda交通安全かるた」は、子どもたちに覚えてほしい交通ルールやマナーを45種類紹介。かるたで遊びながら、親子で「正しい交通行動」や「命の大切さ」について学べるようになっています。家庭用の普通サイズに続き、指導者の皆様からご好評いただいておりました大判セットの販売を開始いたしました。

従来のかるたの絵札45枚が、A4サイズの大判になり、交通安全教室など集合教育の現場で使いやすくなっております。

「Honda交通安全かるた」大判セットの内容
- ●絵札（大判サイズ）45枚
- ●かるたセット（普通サイズ）1セット
- ●教育指導マニュアル　1部

※定価2万円（税込）

ご購入方法等、詳細は以下ホームページを参照。
http://www.honda.co.jp/safetyinfo/karuta/
お問合せ：本田技研工業（株）安全運転普及本部
TEL 03（5412）1736

札がわかりやすく、子どもたちの交通安全のポイントを押さえた内容でよかった。ちょうど仲間意識が芽生え、みんなで何かに取り組むのが楽しい時期ですから、今日はチームで応援合戦を繰り広げながら、楽しく学べたと思います。このように遊び心のある教材は、とてもありがたいですね」と、今回の感想を語っていた。

見て、聞いて、考えて身につく交通安全

同じ年代向けの交通安全教育の事例を、もう一つ紹介しよう。本田技研工業（株）熊本製作所（熊本県大津町）では3月6日、周辺地域の子どもとその保護者を対象に、「大津地区親子交通安全教室」を開催した。春の入学シーズンには、登校に慣れない新小学1年生が事故に巻き込まれる危険が高まるため、小学校入学前の子どもたちを対象に、事故の怖さを安全に体験してもらい、自分の命を守る意識を高めてもらうことが狙いだ。このイベントは毎年3月に開催され、今回で15回目を迎える。

同製作所では、開催にあたって従業員の家族だけでなく、製作所のある大津町と近隣の菊陽町、合志市、西原村など、各自治体の協力を得ながら、幅広い親子に参加を呼びかけた。今回は保護者101人、子ども139人の計240人が参加、熱気あふれる交通安全教室となった。

この日はあいにくの雨天。屋外で予定されていた事故再現などのデモンストレーションは中止となってしまったため、室内で交通安全教育プログラム「あやとりぃ[※1]　ひよこ編」を活用した交通安全指導が行われた。親から子へ、あるいは集合教育を通じて、日常生活のなかでの交通行動の基本を教えることを目指したこのプログラムでは、CDを使って自動車の音や、生活のなかのさまざまな音を聞かせるほか、交通安全に必要なポイントをすべてクイズ形式で考えてもらうなど、子どもが興味を持ち、楽しく学べるように工夫されている。

指導を担当したのは、大津地区交通安全協会・交通安全講習員の桑原洋子さん。

ホンダでは近年、地域の交通安全教育指導者の養成に力を注いでいるが、その一環として同地区の講習員にも「あやとりぃ」の指導ノウハウを提供した。

今回の交通安全教室では、交通安全のポイントを示した「あやとりぃ　ひよこ編」のイラストを、会場のスクリーンに映しながら指導が行なわれた。例えば、道を歩く場所。会場前方のスクリーンには、車道と歩道が分かれていない道路と、そこを往来するクルマや子どものイラストが映し出される。

「こういう場合は、どこを歩けばいいのかな?」と、桑原さんが問いかける。即座に子どもたちから、「右!」と元気な声が上がる。「そう、りかちゃん（道路の右側を歩く女の子のイラスト）がいるほう、右側だよね。では、自分の右手はどちらかわかりますか?　右手を上げてみてください」と、桑原さんは子どもたちに、実際に動作を促しながら指導を進めていく。こうしてわかりやすいイラストを見ながら、子どもたちが交通安全の基本を楽しく学べるように配慮されている点が、「あやとりぃ」の特長だ。

当日はこのほか、シートベルトコンビンサーで5km／hからの衝突を実際に親子で体験し、自動車乗車中のシートベルト着用の重要性を再確認してもらった。4月から小学校に進学する子どもと参加した小此木（おこのぎ）起志江さんは、「これまで幼稚園へは私がクルマで送迎をしていました。4月からはクルマの往来のある通学路を自分の力で通学しなければいけないので心配でしたが、この教室に参加して安心できました。入学直前のタイミングで信号の意味や、道路を横断する時の注意点など、基本的なことを教えてもらえたのがよかった」と、親子交通安全教室の感想を話してくれた。

「あやとりぃ　ひよこ編」を活用して、正しい歩き方を子どもたちに伝える

自転車シミュレーターを活用した教育

同じ子ども向けの交通安全指導でも、小学生になると、より実践的な教育が求められるようになる。この年代になると、友だちと自転車に乗って出かけるなど、行動範囲がさらに広がるため、交通社会のなかでの危険予測能力なども高めていく必要がある。

ホンダでは、そうした危険を安全に体験する実践的な教育を効果的に行うために、「ホンダ自転車シミュレーター（以下、シミュレーター）」[※2]を開発、今年2月より発売を開始している。合わせてシミュレーターを使った教育プログラムも整え、小・中・高校生や高齢者向けの交通安全教育の現場で活用いただいている。

3月2日、静岡県磐田市立豊浜小学校では、このシミュレーターを活用した交通安全指導が行なわれた。背景には、同校では小学1年生でも、帰宅後や休日は、保護者の判断で自転車の利用を認めているため、多くの児童がすでに自転車に乗り始めているという実態がある。

今回の指導は、磐田警察署交通安全指導員の秋元智佳子さんが担当。最初に自転車利用に関わる基本的な指導が行なわれた。スクリーンにイラストを映しながら、自転車の安全な乗り方、歩道を走行する時の注意点、道路を渡る時のルールなどを、一つずつ丁寧に指導していく。

続いて、いよいよシミュレーターを使った指導が始まる。最初は担任の先生がシミュレーターに乗り、危ない乗り方を実演。子どもたちは口々に、「わー、危ない!」「だめだよ」などとつぶやきながら、担任の宮沢知子先生の様子を見守る。一見、ただのデモンストレーションのようだが、このシミュレーターの威力はここから発揮される。シミュレーターには振り返り機能があり、今見たばかりの走行状況を再生しながら、どこが悪かったのか、どのようにするべきだったのかを確認できるのだ。

例えば、交差点に差しかかったところで画像を停止。秋元さんはここで、「この交差点では『止まれ』の標識がありませんね。だけど、左からクルマが来ているのが見えたかな?だから標識がなくても、交差点ではいつでも止まれるようにスピードを落とし、よく確認しましょう」と説明する。

さらにこのシミュレーターには、同じ場面を自転車利用者の側からだけでなく、別の視点、例えばドライバーの視点から確認する機能も付いている。秋元さんはこの機能を用いて、「運転手さんからは、自転車がどう見えたのか、確認してみましょう」と、ドライバー視点からの映像を再生。「運転手さんからは、宮沢先生の姿が見えないね」と、自転車が木に隠れて見えなくなる場面で映像を止める。こうしてリアルな動画を見ながら、死角の確認などを行うことで、子どもたちも納得しながら、自転車の安全な乗り方を身に付けられるのだ。

ひと通り指導が終わると、今度は子どもたちの代表が、シミュレーターを体験。画面の状況に合わせ、「わあ、クルマが来た」などと歓声を上げながら、場面に応じて実践的なアドバイスを受ける。終了後、同校の安藤隆敏校長は、「最新の技術を使って指導してもらえたので、非常にわかりやすかった。子どもたちは、お題目のように交通ルールはいえるけど、なかなか行動に結びつかない。今日は言葉だけでなく、シミュレーターを使って実践的な指導が受けられたので、子どもたちの理解も深まったと思います」と語っていた。

親子の絆を深めながら、ルールの大切さを学ぶ

ホンダの交通教育センター（もてぎ、埼玉、浜名湖、鈴鹿、熊本）では小学生とその親を対象に、バイクを運転する体験を親子で共有することで、交通安全の基本を学び、親子の絆を深めてもらうことを目的と

シミュレーター上の見通しの悪い交差点で左右確認を行う児童

シミュレーターの振り返り機能を使って、指導員が児童にアドバイスを行う

※1　あやとりぃ＝本田技研工業（株）安全運転普及本部鈴鹿普及ブロックが鈴鹿市と協力して開発した交通安全教育プログラム。小学3・4年生向けの「あやとりぃ」、幼児向けの「あやとりぃ ひよこ編」、小学生向けの「あやとりぃ 自転車教室」、高齢の歩行者・自転車利用者向け「あやとりぃ 長寿編」がある。あやとりぃは「**あ**んぜんを　**や**さしく　**と**きあかし　**り**かいして　**い**ただく」の略。詳細は右記ホームページを参照。　http://www.honda.co.jp/safetyinfo/kyt/ayatorii/

特集：子どもへの交通安全教育 ―子どもの特性を踏まえた教育の重要性

したスクール「親子でバイクを楽しむ会」を開催している。このスクールは、お父さんやお母さんが先生役となり、子どもたちにバイクの操作方法から、ルールやマナーの大切さを伝える。

このスクールが3月13日、アクティブセーフティトレーニングパークもてぎ（栃木県茂木町）で開催され、4組の親子が参加した。

「今日はみなさんのお父さん、お母さんが先生です。先生の言うことを守ってください。そして、バイクを運転する時の決まりがあります。決められた服装と用具をきちんと身につけて運転しましょう」と、指導を担当する鈴木正司インストラクターが受講中のルールを話す。バイクは初めてという子どもたちが、最初にアクセルや前後ブレーキなど、バイクの各部の役割や操作を学んだ後、実際にバイクに乗車して運転を学んだ。

練習を終えた子どもたちからは「最初は不安だったけれど、がんばって運転できるようになって、うれしい」という声が聞かれた。

小学2年生の子どもと参加した栗田真さんは、こうした試みの意義について、「子どもが私のアドバイスを素直に聞いて、自分で課題を修正しながら、上達していく様子を見て感動しました。このスクールの経験を通じて、ルールを守らないと危ない目にあったり、人に迷惑をかけてしまうことを、子どもなりにわかってくれたと思います」と語った。

「親子でバイクを楽しむ会」では、お父さんが先生役になってバイクの安全運転を教える

子どもの心理と身体の発達特性に合わせた教育を

以上のようにホンダでは、子ども向けのさまざまな教育ソフトの開発、交通安全教室などのイベントやスクールを展開している。さらに、イベントを主催するだけでなく、地域で交通安全教育ができる指導者の養成を進めるなど、交通安全教育の裾野を広げるための取組みを推進している。

しかし、一口に子どもの交通安全教育といっても、それが子どもの成長段階に適したものでないと効果を発揮しないことは、冒頭で述べた通りである。では、そもそも子どもの心理特性とはどのようなものなのか。また発達心理学的な観点から見ると、子ども向けの交通安全教育では、どのような配慮が必要になるのか。発達心理学が専門の小野寺敦子・日白大学人間学部心理カウンセリング学科教授にお話をうかがった。

「心理学では、人間は幼児期から児童期、青年期、成人期、高齢期に至るまで、生涯にわたって成長していくものであり、それぞれの年代の心理特性に合った交通安全教育が求められると考えています。子どもへの交通安全教育でも、それが子どもの特性にあったものかどうか、よく見きわめて実施する必要があると思います」。

小野寺教授によると、子どもが自分を徐々に認識し始めるのは、1歳を過ぎたあたりから。それがある程度確立され、自我が芽生えてくるのが3歳前後からで、この年代から5～6歳くらいまでは、「自己中心性の時代」として特徴づけられるという。

「この時期の子どもは、自分の視点でしか物事を見ることができません。例えば、お母さんが道路の反対側にいて、それを見つけた子どもが急に飛び出したりするのは、この年代の子にそうした心理特性があるからです。要するに、交通状況を自分の視点から見ることができても、他者から自分がどう見えるかを想像したり、次にどうなるかを予測する能力がない。ですから、この年代の交通安全教育では、まず『止まる』『見る』といった基本動作を教え、自分の感情をコントロールできるように教育していくことが大切です」。

では、その上の小学生年代になると、子どもの心理特性はどう変わるのか。小野寺教授によれば、心理学用語でいう『超自我（スーパーエゴ）』が芽生えるのが、だいたい6歳以降から。この年代の子どもは、自分の存在を超えた社会のルールがあることを、徐々に理解し始めるのだという。これは交通社会でいえば、誰もが守るべき交通ルールがあって、そのルールを維持することで社会が成り立っていることを、子どもながらに徐々に理解できるようになるということだ。

「ですから、交通ルールを本格的に学べるのは、実際にはこの年代からでしょう。また、この年頃になると、先ほどいった他者視点から物事を見る能力もついてきますから、危険予測なども行えるようになります。その点で、ホンダが開発した『あやとりぃ』や自転車シミュレーターのように、イラストや動画などを用いて交通ルールの基本を学んだり、危険予測能力を養うアプローチは、大変よいものだと思います」。

一方、身体特性の面で小野寺教授が危惧しているのは最近、足の土踏まずが未形成の子どもが増えていることだ。「土踏まずは1歳半から3歳半にかけて形成され、立っている時のバランスを保つ機能があります。これが未形成ということは、今の子どもたちは歩いている途中で、きちんと止まることが苦手になっているということです」。

目白大学教授・小野寺敦子さん

もう一つ、小野寺教授が強調したことがある。それは子どもの教育では、当の子どもだけでなく、大人にも学ぶべき点があるということだ。「教育の現場では、子どもたちの心理特性、身体特性を十分に理解せず、大人の目線で学ばせる、いわゆる『しつける』という、一方的な教育に陥りがちです。しかし、そうした教え方はそろそろ見直す時期にきていると思います。まずは大人が、子どもの特性をきちんと知る必要があって、それをきちんと理解した上で、子どもの教育を考える必要があります」。

今はそうしたことを、大人がきちんと学ぶ機会が少ないのではないかと、小野寺教授は指摘する。交通安全教育の現場でも、今後はそうした観点も取り入れていく必要があるといえる。

これから幅広い地域において、次世代を担う子どもたちのための交通安全教育を、ますます活性化させていく必要がある。子どもたちが今後、よりよい交通社会人として成長できるように、大人は子どもの特性を見きわめながら、なるべく多くの教育機会を設け、効果的な指導のあり方を模索していかなければならない。

NEW 「新 あやとりぃ ひよこ編」誕生!

Hondaは、常日頃から子どもたちに接する機会の多い、保育園・幼稚園の先生方や地域の交通指導者が、自らの手で交通安全を繰り返し教え広めていくことが重要と考え、未就学児童（4～5歳）を主な対象とした従来の交通安全教育プログラム「あやとりぃ ひよこ編」を現場の実情にあわせ再編した。「新 あやとりぃ ひよこ編」として今年度より広く展開していく。

教材内容

- ●未就学児童の特性、理解力に合わせた「大型ワークシート」を作成
- ●子どもたち自らが選択し、大型ワークシートに貼り付け回答できる、「キャラクター・クルマ・信号機」を作成
- ●保育園・幼稚園の先生方自らが交通安全指導できる「マニュアル（台本）」を用意
- ●子どもたちに「止まる」「見る」ことを身につけさせるために、繰り返し指導が行える「一時停止ステッカー」を用意

一時停止ステッカー

※保育園・幼稚園の先生方や地域の交通指導員等、自らで交通安全教育を実践いただける方には、指導者養成と併せ教材の貸し出しを行う予定。
お問合せ：本田技研工業（株）安全運転普及本部　担当：山田
TEL03(5412)1736

※2　Honda自転車シミュレーター＝自転車利用者のマナーや危険予測能力を高めることを目的に、Hondaが開発した体験型教育機器。詳細は右記ホームページを参照。http://www.honda.co.jp/simulator/bicycle/
お問合せ：本田技研工業（株）安全運転普及本部　教育機器課　TEL048（452）0559